

図書館を出会いの場所に

附属図書館長 小澤 康彦

“Library”という英語は、1380年に用例のあるフランス語“librairie”(今は「書店」の意)と係わりを持つが、元来はラテン語の“liber”(樹皮、本)に由来し、かつて筆記の素材として木の皮が用いられたことを示している。今日の「図書館」の意味で用いられた最初の例は The Oxford English Dictionaryによれば1449年頃である。

こうした歴史を持つ図書館における最近の大きな変化は電算化であり、静岡大学図書館の場合も1986年以降時代の動きに対応した態勢を調えつつある。学術情報センターとの連結、学内LANの活用等により、情報の収集は世界的な規模で敏速化、効率化がはかられている。この様な対応は、学問の進歩と現代社会の需要に即応してのものであるが、留意すべきはこうした動向は時代の要望の一部の要素であるということである。現代における人間存在の問題には、機械的な効率化とは別個の、能率や実用性を越えた普遍的な人間性、人生観、幸福観等の考究すべき課題が、ますます重要性和緊急性を伴って不可分に現出して来ている。

新しいものについての、あらゆる情報機関、行政組織等を通しての情報の奔流は、それ以外の多様なものの存在とその意義への配慮を多くの人々から奪いがちになる。画一的な価値観を無意識のうちに抱かせ、同一の価値(有名になること、金等)の実現に人々を狂奔させる結果をまねく。そうした流れのなかに溺れるのではなく、自分自身の生き方を確立したいと願うのであれば、世の中を批判的に観る眼を養わなければならない。そのための最も良い方法のひとつが、図書館を訪れ、時代の動向に批判と提言を行った先達の言葉に出会うことである。

「牛になることはどうしても必要です」(夏目漱石)競馬の駿馬の如く、鼻面の差でも他を押さえ、栄誉と金を手に入れて、急速に襲う力の衰えと共に消えるのもひとつの生き方である。それに対して、牛歩という言葉に象徴される様に、長い絶えざる地味な

努力の継続の生き方もある。凡人の生涯は、牛の忍耐によって非凡な意義を持つ様である。

「美術家は時に原始人に立ち返って自然を見なければならない。宗教家は赤子^{あかこ}の心にかえらねばならない。同時に科学者は時に無学文盲の人間に立ち返って考えなければならない」（寺田寅彦）自分がしている仕事の、自分の人生そして社会にとっての意味を絶えず原点に立ち戻って考えることによって、過ちのより少ない選択が可能となる。

図書館には、この様な秀れた先人との出会いがあり、また現代の日本の技術万能の世情、物質主義、拝金主義、皮相な信仰心に非常に類似した19世紀ヴィクトリア朝の英国において、カーライル、ラスキン、モリス、アーノルド等同時代の人々が敢然として母国を批判し、あるべき指針を示そうとした母国愛、義務感の強烈さに出会うことが出来る。一行の言葉の自分の生き方における意味を考えて一日を過ごすのは、取り分け青年時代においては貴重であり、至上の贅沢である。そしてさらに、こうした志の仲間に出会うこと、その中に将来人生を協力して歩むひととの出会いがあるならば、それに過ぎる出会いはない。館長としてもこれに勝る慶びはないのである。



※ 伊豆長岡にカウンターバーが出現??!!??

左は自慢の大立看板……詳細は5ページを。

お知らせ

- ◎ これまで情報処理センターの「学内蔵書検索システム」を、各研究室からアクセスするためには、純正のPC*Iボードが必要でした。このほどPC-9801およびDynaBookに限って長岡技術科学大学が開発したNICAを使用すれば、通常のTCP/IP下でのアクセスが可能となりました。
- ◎ 詳しくは、図書館参考調査係あるいは情報処理センター分室の高田さんに問い合わせして下さい。

静岡大学附属図書館の今後の課題

事務部長 鈴木英夫

静岡大学における自己点検・評価に基づく報告書としては「静岡大学の教育と研究」及び「静岡大学教官総覧」が平成5年3月から刊行されている。一方、各部局からもそれぞれの部局の立場からの自己点検・評価の趣旨に沿った報告書が公にされている。そのような中であって附属図書館では、平成6年2月「静岡大学附属図書館の現状と課題」を刊行した。これは平成5年9月に図書館委員会の下に館長を委員長とする14名の委員からなる「附属図書館自己点検・評価実施委員会」が結成され、国立大学図書館協議会の作成になる「国立大学図書館における自己点検・評価について——よりよき実施に向けての提言——」を参考にしながら約半年間、集中的に検討した結果を取りまとめたもので、名古屋大学、富山大学、高知大学等続く、非常に早い刊行となった。

全体の構成は、第1章 理念と目標、第2章 利用者へのサービス、第3章 サービスの基盤的業務、第4章 経営計画、第5章 浜松分館—現状と課題—、となっている。本稿ではこの報告書の最重要な部分を占める「第1章第3節 今後の課題」の部分を紹介しながら、私見を述べてみたい。

取り上げられた課題は全部で5つあり、その第1は人的予算的措置の必要性である。ここでは、蔵書冊数は約2.2倍、学生数で約1.5倍(いずれも昭和48年に比較)になっているのに職員数では逆に定員削減により3名減となっており、その結果中規模(学部数5~7程度)の国立総合大学14校の中では職員1人当りの負担業務量では第1位になっている事実を数字をもって示している。又、図書館の運営経費については中央校費、いわゆる共通経費としてではなく、各部局からの供出に依存していることによる財政的基盤の脆弱性を指摘している。前者の悩みは全国的な問題ではあるが、大規模校に比べ中小規模校は職員の絶対数が少ないためその問題はより深刻であり、ここで提案されているように定削の一率配分の見直しが望まれるところである。後者の問題の解決策の一つとして、一部の国立大学で行われている大学の総予算の一定の率を図書館予算に確保する制度を導入してもらえるとよいと思う。

第2は目録データ遡及入力 of 促進についてで、昭和62年度以前の受入図書約50万冊の電算入力の必要性を提言している。これに要する必要経費は現状では文部省よりの配当が期待できないことから、各大学では自助努力で進めているようであるが、幸い本学では平成5年度より教育研究学内特別経費の配当を見たので、自動入力ソフトの開発等により、日常業務を阻害しない形態で作業を進める見通しがたった。

第3は、日曜・休日の開館及び、開館時間の延長についてその必要性の提言がなされている。国家公務員の完全週休2日制の実施された平成4年5月より本館は午前中、浜松分館は午後のそれぞれ土曜日の半日開館が行われているが、これは職員の振替休日とアルバイトで賄われており、十分な図書館サービスとは言い難い。土曜日の終日開館及び日曜開館(試験期などの季節的開館を含めると12の国立大学で実施)が今後の目標となるが、いずれにしても人的予算的措置が不可欠である。

第4に本館書庫及び閲覧室等の増改築の必要性を掲げている。ここ数年、本館については書庫の狭隘化の解消のために、書庫増設の概算要求を行っているが、今後は単に書庫の増設にとどまらず、開架図書スペースの拡充及びニューメディア等のサービスコーナーの充実も視野に入れて検討して行きたい。

第5には本館と浜松分館との連携協力及び情報処理センター等学内情報施設とのネットワークの強化充実の必要性を訴えている。本館と浜松分館とは約80km離れており、この物理的距離のハンディを克服するためにも、コンピュータネットワークを活用した連携を図らねばならない。新学部が城北地区に設置されることになればますますその必要性が高まるであろう。その場合、大切なことは本学が潜在的に所有する各種データベース等の資源をどうすべての学内利用者に容易にアクセス可能にするかにかかっており、学内LANの設計においてもその視点が取り入れられていなければならない。

以上5つの課題はいずれも1大学、1図書館では解決できない広がりや深さを持っており、行政当局者、学内関係者の御理解を得なければならないものばかりであるが、現場を担う我々図書館員は、利用者の声に耳を傾けながら少しでも役立つ図書館作りに励みたいと思っている。

国大図協総会 静岡で開かれる!

(第41回 国立大学図書館協議会総会)

この6月23・24日の両日、伊豆長岡町総合会館で第41回の「国立大学図書館協議会総会」が開かれました。年に一度、全国立大学附属図書館の館長・部課長・事務長が一同に会するビッグイベントで、今年は本学が当番校のため本学の永井学長の開会挨拶により開始。百年に一度番が回って来るか来ないかの出来事で、職員は、当日はもちろん、準備段階からてんやわんや。それでも、めでたく成功裡に終了しました。以下は、裏方として参加した職員から見た総会の点景と、閉会式で小澤館長が述べた挨拶。

■ 6月22日の朝、図書館からワゴン車とマイクロバス、さらに乗用車が2台出発。総会の正規の参加者たる館長、部課長以外に11名の職員が同乗。残留組はそれより少ない10.5名で、それでも開館はするので行くのも大変だが、残るも同じ。誰かが病気で

して休んだら……。

- 長岡に到着後、東海地区の国立学校、研究所等からの助っ人も合流し、早速準備に取りかかる。分割して運搬してきた超大作の自作の立看も出来上がり、設置OK。
- 夕刻から、準備理事会が開かれるので、その受付も始まる。最初の公式の仕事。担当者に緊張がはしる。エライ人たちが相手。ソソウがあってはならないのだ。
- 明けて23日。朝30分程の間に200人以上の人のエントリー。会費を受取り資料を手渡すのだが、相手によって渡す資料の中身が異なる。大忙がしでかつての静大の課長等、顔見知りの方に出会っても挨拶さえ満足にできない。すみませندシタ。
- 手伝いの人間が、懇親会に参加させて戴くケースは珍しいのではないかと思う。図書館の日頃の運営が民主的であることの反映か。おかげで、受付、会議場等で礼を逸した失礼を取り戻すことができた。何よりも、久しぶりにお会いできた方と歓談できたのは嬉しい。
- 24日午前中の分科会、議



論続出のためなのか、第1、第2とも終了時刻に近づいても終わる気配が無い。参加者の方々の真剣な眼差しに、マイクを運ぶ係の者も必死に対応していたという。不覚にも、この総会のことを、参加したことも無いくせに勝手に、単なるお祭よ、と思っていたことを反省した次第。

- 好評だったのが、コーヒーとお茶のサービス。ロビーにちょうど具合の良いカウンターがあり、そこでふるまわれたのだが、お昼や休憩時間は、もちろん、てんてこまい。のみならず、会議中も抜け出て飲みに来る人、チラホラではなく大勢。「静岡だから茶色のお茶を飲まず訳にはいかない」という心意気が良かった!!!消費された紙コップ、締めて1,234個。洗った湯飲みの数、数知れず。

(M)

■ 小澤館長の閉会式における挨拶

二日間に亙りまして、準備理事会から数えますと三日間でございますけれども、会長の開原先生初め理事の方々、役員の方々、そして何よりも初めから終わりまでいろいろと細かな御配慮を戴きました事務局の方々に心から御礼申し上げます。また、御出席の皆様すべての御協力に対しまして厚く御礼を申し上げます。私が経験しましたいろいろ

な学会、その他の会合のなかでも、これだけ行儀が良いと申しますか大変節度を持った模範的な会合は無かったと思います。この国立大学図書館協議会総会は、文字通り皆様の御協力によりまして終わらせて載いた、という事を有り難く思っております。

また、只今も開原先生からも御話がありましたように、静岡大学だけがこの準備をいたしたわけではございません。潮木先生の名古屋大学を中心といたします東海地区の各大学等から、例えば10名の協力者の派遣、その他数々の御配慮を戴きまして、この会を無事に終了させてい載いたということを、当番校といたしましては大変有り難く思っております。

昨日も申し上げましたように、私自身は図書館というものは、この頃情報という言葉が盛んに使われますけれども、単なる「情報の宅急便屋」に止まって欲しくはない、という気持を持っております。今日のお話しの中にもございましたけれども、こういう時代になりますと情報処理センターとの関係がどうなるんだろうか、ということを考えておりまして、昨日も御紹介のありました情報処理センターにとって図書館というものが重荷になっているということ、あれが多くの大学の実情ではないかと感じます。それで、電算化ということのみが喧伝され過ぎますと、私も半分本気に思っているのですが、今回、御承知のように第41回でございますけれども、果たして第50回の総会が開かれるのだろうか、もしありうるとするなら「情報処理センター全国協議会図書館部会」という形で開かれることになるのではないか、もちろんそのころ、私自身もそうなのですが、ここにいらっしゃる大部分の方は、後にいろいろと思いを残しながら次の世代に課題を委ねて大学からお去りになっておられるはずではありますが……。どうも私が思いますところ図書館にはいろいろな問題が未解決のまま山積しております。例えば、もう十分御承知の臨時職員の問題がございます。本年3月に出了た文部省の実態調査によりまして国立大学図書館職員の37.4パーセントの方が臨時職員であるというデータが載っております。実に10人のうち4人弱の方が、あのような大変不利な条件で大事な仕事をなさっている、この現状を踏まえますと、例えば図書館は世界に向かつての情報発信基地にというようなことが言われていますが、しかし足元を見たらこんな脆弱な基盤で、果たしてその課題に応えられるのだろうかということを、本当に思うんですが、やはり臨時職員の問題を解決して、本当は図書館は電算化に入るべきだったんじゃないかと、私は大変失礼ながら、大勢の方々が御苦勞なされたと思うんですが、私自身も改めてその事を痛感いたしております。

目に見えるものに対してだけ判断をする、評価をする、こういう価値観の現代におきまして、図書館あるいは大学というものは、見えないものの価値というものを甦らせるために、世の中に対して問題提起を行う場所となるべきではないか。で、図書館というのは、そのためのいわば現代社会の歪みを照らす知的なライトハウス、灯台であるべきではないかと、そのように感じております。図書館の地盤低下ということが言われておりますけれども、それはとりも直さず、現代社会において時流に流されている大学の地盤低下を意味しているのではないかと、大変僭越ではございますけれどもそのように感じております。

それにしましても、この皆様の図書館に対する愛情、あるいは熱情というものが次の世代の方々に伝えられて行きまして、そして開原先生を中心とした事務局の方々、そして皆様の御協力によりまして、なんとかこの困難な時代を、図書館が大学の研究・教育の中心機関として存続しつづけることを、私も心から願っているわけでございます。

幸いなことに、来年の東京工業大学の総会の折にはまだ私も館長でおりますので、是非またお目にかかっていろいろなお話を承りたいと心から願っております。お帰りをお急ぎの方もいらっしゃるのに、大変申し訳ありませんが、勝手な事を申し上げました。重ねて御協力に対しまして心から御礼申し上げます。

最後になりましたが、この会館の使用に当りましては、準備段階から館長さん初め、この表舞台には出て参りませんが、音声とかライトとか、あるいは御出席の方々ひとりひとりに勝るとも劣らない注意力をもって昨日の懇親会も含めて会の進行を助けて戴いたこの会館のスタッフの方々全員に対しまして、改めて御礼を申し上げたいと存じます。

それでは、どうも有難うございました。

ILLの電算化軌道にのる！

相互貸借業務

ILL(図書館間相互貸借)における文献複写・現物貸借の件数は毎年増加していたが、平成5年度から学術情報センター提供のILLシステムへ参加したことにより、他館への依頼、他館からの受付ともに急増し、文献複写は依頼で1.6倍、受付で2.4倍、現物貸借は借受で2.0倍、貸出で2.1倍となった。

急増の主な理由として、ILLシステムが学術情報センターと全国の大学図書館等との共同作業により構築されたNACSIS-CATの総合目録データベースをツールとしてのシステムであり、書誌・所蔵調査が比較的容易になったこと、郵送送付であった依頼書をオンライン上で処理することにより、文献の入手に要する時間が短縮されたことがあげられる。

特に、依頼先で当該資料が不明等になっていて断われた場合には、これまで依頼書のやり取りだけで、ひと月以上もかかっていたようなものでも、次の依頼館へ自動転送されることにより同日処理も可能となった。

また、ILLシステムの機能拡張として、NACSIS-IR(情報検索サービス)からの申し込みもできるようになっており、平成5年度において全国で約50名の研究者が約460件の文献依頼を研究室の端末から図書館に申し込んでいる。当館でも利用者の要求があれば取り組んでいきたいと考えている。

(参考調査係)

■人事異動

(配置:6.4.1付)

鈴木 彬司(事務部長→東京工業大学研究
協力部長)鈴木 英夫(東京大学附属図書館情報管理
課長→事務部長)大石 貞行(総務係長→農学部附属農場・
演習林総務係長)四ノ宮立男(国立遺伝学研究所管理部会計
課用度係長→総務係長)増田喜代見(管理運用係管理運用主任→工
学部経理係経理主任)石上 修二(法経短期大学部総務係総務主
任→管理運用係管理運用主任)

■平成6年度図書館委員会委員

館 長 小澤康彦

分 館 長 清水 孝

人 文 学 部 望月郁子 浅利一郎

教 育 学 部 新保 淳 上田 功

理 学 部 飯島欣哉 石館健男

工 学 部 末長 修

農 学 部 糠谷 明 小嶋睦雄

教 養 部 高野 優 横山義昭

電子工学研究所 木下治久 早川泰弘

電子科学研究科 喜多尾道火児 野飼 亨

法経短期大学部 根本 猛

本 部 沖吉和祐

附 属 図 書 館 鈴木英夫

■平成6年度図書館業務電算化委員会委員

館 長 小澤康彦

分 館 長 清水 孝

人 文 学 部 望月郁子 浅利一郎

教 育 学 部 新保 淳 白井靖人

理 学 部 小沼茂樹 石館健男

工 学 部 末永 修

農 学 部 糠谷 明 小嶋睦雄

教 養 部 横山義昭 石田俊正

電子工学研究所 早川泰弘

法経短期大学部 根本 猛

附 属 図 書 館 事務部長 情報管理課長

情報サービス課長 学術情報係長

■平成6年度「図書館通信」編集委員

館 長 小澤康彦

理学部 石館健男

教養部 横山義昭

図書館 畠山百合子 山川玲子

小浜 進 望月信夫

◎夏季休業に伴うお知らせ◎

1. 7月29日(金)から9月27日(火)までの間の貸出しについては、貸出し期限を
10月5日(水)とします。

2. 休業期間中(8月1日(月)~9月14日(水))の開館時間は次のとおりです。

平日 8:30~17:00 [土曜日は開館しません]

静岡大学附属図書館報「図書館通信」

発行所 静岡大学附属図書館

印刷所 (株)黒船印刷

第25巻1号(通巻108号)

1994年 7月15日

〒422 静岡市大谷836

☎ 054(237)1111

© 1994 by Shizuoka University Library